特別企画展「日本のやきもの」展によせて

初代伊東陶山の探求

ー古典の学習・技術の開発・意匠の改革ー

初代伊東陶山は、近代京焼の発展に大きく貢献した人物です。陶山の略歴については、黒田譲『名家歴訪録 上編』(1901年)や二代伊東陶山編『初代陶山小伝』(1932年)、近年の研究では北山明乃「初代伊東陶山の生涯と業績」(『デザイン理論』77号、2021年)に詳しく、それらによると陶山は、弘化三年(1846)に京都の粟田に生まれます。12歳の時に円山派の画家の小泉東岳のもとに入門し、絵画を学んでいましたが、東岳とその妻が生計の足しにするために茶碗の絵付けや手びねりの土瓶の製作などを行っていたことから陶技も学びます。幕末の京焼というと、五条坂と粟田に大きく分かれていましたが、陶業を本格的に志した陶山は、18歳で五条坂の亀屋旭亭に師事したのを皮切りに、五条坂の村田亀水、幹山伝七、粟田の帯山与平衛、一文字屋忠兵衛などのもとで学び、さらには信楽や丹波、伊予、三田、美濃、瀬戸など、代表的な窯業地を巡って見聞を広めました。様々な研鑽を積んだ後、明治維新直前の慶応三年(1867)、京都の祇園に店を構えます(後に三条白川筋へ)。

京焼の中でも粟田焼は、雅な色絵陶器を得意としていましたが、明治維新によって大きく社会が変化すると、それまでの支持基盤を失い、衰退の危機を迎えます。その中で、薩摩焼より学んだ派手な金襴手の色絵陶器「京薩摩」は、欧米向けの輸出品として人気を博し、一時、粟田焼の主要製品となりました。しかし、明治二十六年(1893)シカゴ万博の頃よりジャポニズムが衰退し、薩摩焼や京薩摩の人気が急落します。こうした状況を打破しようと、陶山は粟田焼、さらには京焼全体の復興に心血を注ぎます。

陶山が特に励んだのが、古典の学習、技術の開発、意匠の改革です。社寺やコレクターを訪ねて古陶磁を早くより勉強していた陶山でしたが、資力に余裕ができてからは自らも蒐集するなど、古陶磁研究が熱心であったことが知られます。大正八年(1919)には、当時の東宮殿下の御成年を祝して、京都・奈良の帝室博物館に蒐集した古陶磁を寄贈しています。古陶磁より学びつつ、新しい技術の開発にも熱心で、多様な色味の釉薬や胎土を発明しています。こうした技術の開発を、京焼全体で取り組むために明治二十九年に設立されたのが、京都市陶磁器試験所(明治三十六年に京都市陶磁器試験場に改称)です。窯業技術者の藤江永孝や植田豊橘を所長(場長)として様々な開発が行われました。技術の開発とともに改革が急務であったのが意匠(デザイン)です。京焼といえば、線描を基調とする緻密な絵付けが主流でしたが、明治三十三年のパリ万博の頃より欧米ではアール・ヌーボーが台頭し、器物と一体化した新しい意匠が求められていました。そうした意匠改革のために、京都高等工芸学校校長の中沢岩太や教授の浅井忠、図案家・画家として活躍した神坂雪佳などを意匠の指導役として明治三十六年に結成されたのが遊陶園です。陶山は、京都市陶磁器試験所や遊陶園に当初より参加した主要な製陶家の一人であり、京焼発展のための様々な活動の中心にいたことが分かります。陶山は、自らの経験や技術を秘匿することなく、工場を解放し、同業者が視察に訪れた際には、大いに便宜をはかったといいます。こうした様々な貢献が評価され、大正六年に陶山は帝室技芸員に任命されています。さらなる製作に励もうと山科の鏡山に新窯を築きますが、完成直後の大正九年に陶山は亡くなります。

今回の展観では、幕末から近代にかけての京焼の名工たちの作品を八点お借りしていますが、その中の三点が初代伊東陶山の作品です。「色絵柳橋文菓子器」(個人蔵、図1、反対側面は展観のお知らせ参照)には、柳と橋が表されています。柳と橋の組み合わせは、江戸時代前期に活躍した京焼の大成者・野々村仁清の「色絵柳橋図水指」(湯木美術館蔵)を意識したものでしょうか。雲が艶やかな黒色の釉薬で表されているのが特徴的ですが、黒釉の雲形は、仁清の名品「色絵罌粟文茶壺」(出光美術館蔵、図2)にも見られます。

「金地色絵鶴文角皿」(個人蔵、図3)は、江戸中期の京焼の名工・尾形乾山が得意とした角皿の形状に倣った作品です。鶴の文様は、乾山の兄、尾形光琳筆「群鶴図屏風」(フリア美術館蔵、図4〔部分図〕)を思わせます。遊陶園で意匠の指導をした浅井忠や神坂雪佳は、琳派の意匠を積極的に活用したことで知られます。線描主体で緻密に描くのではなく、鶴の数を三羽に絞り、形を面的に大胆に表して、正方形の見込みの中に絶妙に配置しています。

「手付花器」(個人蔵、図5)は、角度によって深い緑色や茶色に見える釉薬が全体に施されています。側面には、浅く斜めに刃を入れており、竹を編んだ籠を思わせる造形にしています。京焼は仁清の時代から、様々な形状を立体的に写すことを得意としており、たとえば、法螺貝や熨斗紙などを実物そっくりに表した香炉や香合などが残されています。竹籠を思わせる本品もそうした伝統を継承していると言えますが、編み目を描くのではなく、幾何学文様のように大胆に刻みつけている点が斬新です。

三点ともに、陶山による箱書があり、「帝室技藝員」印が捺されることから、大正六年以降の晩年の作品であることが分かります。いずれも、古典の学習、技術の開発、意匠の改革に努めた陶山の長年の研究成果が見事に発揮された作品です。　(宮崎もも)

【図版出典】図2:『仁清・乾山と京の工芸』(出光美術館、2014年)、図4:フリア美術館ホームページ(オープンアクセス)

図1

図2

図3

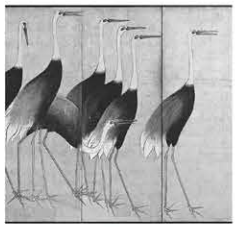
図4

図5

季刊 美のたより No.217
令和3年12月24日
発行　大和文華館

Copyright © The Museum Yamato Bunkakan. All RightsReserved.